

聖書:エペソ人への手紙2章6~10節

説教:良い行いをするために

はじめに

きょうのところを読んで、みなさんはどう思われたでしょうか。10節に「良い行いをするために」とあります。頭では良い行いをすべきであるということはわかっているつもりです。けれどもできないから困っている。そんな方が多いのではないのでしょうか。パウロは私たちを責めるためにこう書いたのか。そんなはずはない。むしろ励ますために書いたはずです。では、聖書は何を言おうとしているのか。ともに考えてまいります。

1 良い行い

1) 造られた

そこで順番が逆になりますが、10節から見えていきましょう。「実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」

たとえば時計というのは、正確な時刻を知るためにある。これが遅れたり進んだり止まってしまうというのでは時計として役に立ちませんからお払い箱になる。これを人間に当てはめてみます。人間は良い行いをするために造られたはずなのに、良いことができないということになれば、極端な言い方になりますが、役に立たないのでお払い箱になるのか。もしそうなら目の前が真っ暗です。もちろんそんなはずはない。

2) 三つの疑問

ここで三つの疑問がわいてきます。一つ目。そもそも良いこととは何かです。この世の中では良いことの基準はコロコロ変わります。夫婦でさえ、何がよいことかでときどき言い争いが起こることがあって意外に難しい。二つ目は、いま見たように私たちは良い行いをするように造られたはずなのに、現実はなかなかできない。これをどう考えたらよいのか。そして三つ目の疑問。9節でこう言っています。「行いによるものではありません。だれも誇ることをないためです。」行いではないと言いながら、その舌の根も乾かないうちに「良い行いをするために造られた」とある。いったいどっちなのか。

2 キリスト・イエス

1) とともに

そのことを考える鍵が6節にあります。「神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。」ここは前回見ました5節と関連があります。そこにはこうありました。「背きの中に死んでいった私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。」もうお気づきだと思いますが、なんども「キリストとともに」ということばが繰り返されています。それだけ大切だということです。

2) ひとりではない

ここで想像してみましよう。「良いことはなんですか。」「あなたは良いことができますか。」そんなふうに関心されている自分を想像してください。どんなイメージを思い浮かべられるでしょう。私は、大勢の人たちに取り囲まれながら頭を抱えながらひとりぼっちで悩んでいる自分を思い浮かべます。周りにはだれも味方がいません。

しかし聖書に書いてあるのは、「キリストとともに」です。良いこととは何かを考えることも、良いことを行うということも、一人で悩むのではない。キリストともにおられて、この問題を一緒に考えてくれるし、なにをするにもキリストと一緒にのだと言っている。

3) 神の賜物であるならば

どうしてキリストがともにいてくれるのでしょうか。最初から私たちに資格があったからですか。とんでもない。私たちは神の御怒りを受けて死ぬべき者でした。それがいま恵みによって救われ、天上にまで座らせてくださいました。キリストが私たちの罪のために十字架でからだを裂いてくださり、血を流して与えてくださった救いの恵みです。それが、あなたは良いことができないので急に態度を変えて不合格ですと冷たく突き放すのでしょうか。そんなことは絶対にありません。

私たちはひとりぼっちではありません。たとえ世の人たちが敵になったとしても、イエス・キリストはいつまでも私たちの味方です。良い行いについても、キリストがともにいてくださって必ず解決を与えてくださるはずですよ。

3 神とともに歩む

1) マルタとマリアの場合

このことは具体的に考えた方が理解しやすいので、その一例としてマルタとマリアのことを取り上げてみます。あるときこの二人の姉妹はイエスを自宅にお迎えることにし、姉のマルタは台所に立ってごちそうを作ろうとてんでこ舞いする。いっぽうの妹のマリアはイエスのそばに座って話を聞いているばかりで手伝おうとしません。いらいらしたマルタは、「妹に手伝うようにとおっしゃってください」とイエスに怒りをぶつけるのですが、イエスは「マリアは良いほうを選んだのです」答えました。そういう場面です。これと似たようなことを経験して悩んだという方が沢山おられるはずですが、

マルタにとって、良いこととは温かいごちそうでイエスを迎えることでした。いっぽうマリアにとっては、イエスの話を聞くことが良いことであった。それで結果はどうだったかというところ、イエスはマリアのことを高く評価しているように見えます。ここで私たちは頭を抱えてしまいます。どんなに部屋がちらかっているように、お腹を空かしているように、どんなときにもイエスの話に耳を傾けることが良い行いである。イエスはそのように教えているのか。みことばも大切ですが、あたたかい料理でもてなしたいという気持ちもやっぱり大切ではないか。どう考えたら良いのでしょうか。

ここで思い出していただきたい。先ほどなんと仰いましたか。「キリストとともに」、これが大切だと言いました。マルタとマリアのこともそこから考えてみたらどうなるでしょう。

2) イエスとともにいる

マリアはイエスのそばに座りながらみことばを聞こうとしていますから、イエスとともにいるのはいうまでもない。一方マルタは、イエスに手作りの料理をだすことが良いことであると考えました。イエスは、そのことを悪いと言っているのではないことに注意してください。マルタはマルタなりに良いことを選んでいっているのです。ではなにが問題だったのか。イエスはマルタにこう仰いました。「あなたはあなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。」マルタが食事の準備を始めたとき、イエスとともに食事ができるのを楽しみにして心に平安がありました。ところが思いがけず料理に手間どっているうちにだんだんイライラが募ってきて、とうとうイエスに怒りをぶつけてしまいます。そのときマルタの心の中にイエスはいたか。イエスのおられるすきまがない。物理的に遠いと

か近いということではありません。心の中の距離を問いかけておられます。良いこととは何かを考えるヒントがここにあります。

3) 良い行いしかできない

そこでもう一度10節に戻ります。「実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」ここに二つのことが書かれています。一つ目。そもそも良い行いは私たちの中にはなかったという事実です。これを聞いてがっかりするかもしれませんが、もっと積極的にとらえてよいと思います。良いことが備わっていないので、良いことができなくて当たり前。そんなふうに見えるからです。もちろんそこで終わっていたら、単なる開き直りです。

そこで二つ目。神は良い行いをあらかじめ備えてくださった。例えば冷蔵庫です。もともと中身は空っぽで何も無い。ところが神が冷蔵庫をおいしい食材でいっぱいにしてくれているので、そこから取り出して料理できる。そんなふうに見える。そうするとどうなるか。冷蔵庫にはおいしい食材しか入っていませんから料理のうまい下手はあるけれど、おいしいものが出来上がる確率が高い。そうすると10節はこんなことを言っていることになる。「神が良い行いを備えてくださったので、私たちはだんだん良い行いしかできなくなる。」

4) 良い行いができないと告白していく

これを聞いて目を丸くするでしょう。「良い行いができないから困っているのに、良い行いしかできないとは何事だ」というわけです。ここでもう一度思いだしたいのは、私たちは一人ではないということです。マルタは心が乱れて、いつきはイエスから離れていたけれど、イエスのところに行つて怒りをぶつけることで、イエスから何が良いことを教えてもらい、もう一度イエスとともに歩む者に変えられていきました。

私たちもおなじです。良いことから外れたことをしていれば、主が導いてくださいます。最初に挙げた三つ目の疑問がありました。行いによるのではないと言いながら、良い行いをするように造られた。いったいどっちなのか。答えは意外に単純です。私たちは良いことができない者です。むしろあなたに背くことばかりしている者ですと祈ること。それが良い行いなのです。私はイエスから最も遠いところにいる者ですと祈るとき、イエスは私

たちを近くに引き寄せ、イエスとともにいてくださるのです。慈愛と恵みに富んでおられる神は私たちを御国に座るにふさわしい者に造り変えてくださいます。自分で変わるのではない。神が造り変えてくださいます。そのような神とともにまた歩んでまいります。